

福岡県大牟田市
JR鹿児島本線「大牟田駅」から車で10分

資料提供: 1.大牟田市石炭産業科学館 3-9.日本コークス工業株式会社 10.大牟田市広報課 出典: 2.『男たちの世紀:三井鉱山の百年』 撮影: 11.12.榎本 碧

我が国の経済を支えた百年の礎

福岡県大牟田市では江戸中期に三池藩により炭鉱の経営が始まった。明治になり一度は明治政府の官営事業になったが、赤字経営が続いたため、明治22(1889)年に三井鉱山(当時三井組)に払い下げられた。

当時、三池炭鉱で産出された石炭は小船に積み込まれ、動力船を曳いて大牟田川から長崎県口之津港へ運び、大型船舶に積み替えて輸出されており、膨大な手間と費用が掛かっていた。明治中期にかけて石炭産業が盛んになり出炭量が増大すると、大牟田で直接大型船に積み込むことのできる石炭輸出港が必要となった。そのため三井鉱山では、プライベートポートとして三池港を築港することを計画した。

三池炭鉱育ての親と呼ばれた圓琢磨(だんたくま。後の三井鉱山会長)は、明治31(1898)年から翌年にかけて海外の港を視察し、英国の船渠技術を取り入れ、当時としては大型の1万トン級の船舶が3隻入港できる港の建設を構想した。建設対象となったのは、当時三川町と呼ばれた一寒村付近である。三池築港に携わった人員は延べ262万人、その工事費は約376万円(現

在の価値で約410億円)に上った。圓は、三池港が完成すれば口之津港までの運搬費、積み替え費が不要になることなどから、年間約80万円程度の経費削減効果があると試算していたが、完成後約7年で全工事費が償却されている。

圓は福岡藩の生まれで、14歳のときに岩倉使節団に同行し7年間米国に滞在した。その間マサチューセッツ大学で鉱山学を修めている。三池港築港以前にも、三池炭鉱の湧水問題解決のため渡欧しポンプ技術を輸入するなど、当時最先端の技術と先進的な炭鉱経営の理念を持っていたが、冒頭の言葉にあるように、圓は一企業の利益追求にはしることなく、大牟田のまちの将来をも見据えた長期的なプランをもって築港を計画したのである。三池港築港はその後、明治末から大正時代にかけて石炭の副産物を利用した石炭化学工業の成長に繋がり、さらに日本初の石炭コンビナートの形成へと繋がっていく。三池港は明治41(1908)年の開港から平成9(1997)年の炭鉱閉山までの約90年間、我が国の経済発展に貢献してきたのである。



「石炭山の永久などという事はありはせぬ。無くなると今この人たちが市となっているのがまた野になってしまう。……築港をやれば、築港のためにそこにまた産業を起こすことができる。……都市として“メンテナンス”(存続)するについて築港をしておけば、何年もつかしれぬけれども、いくらか百年の基礎になる」

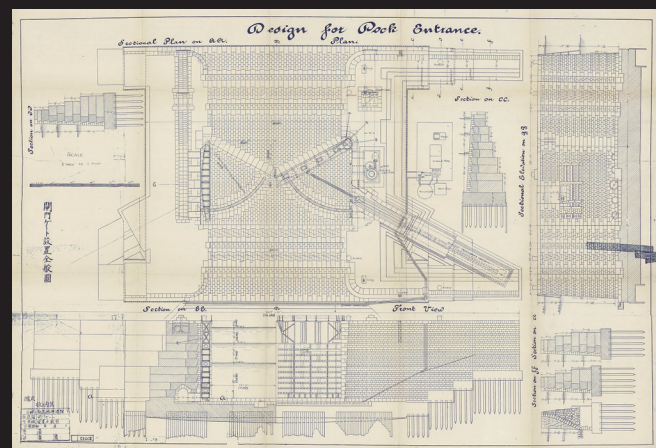
圓 琢磨

2.『男たちの世紀:三井鉱山の百年』

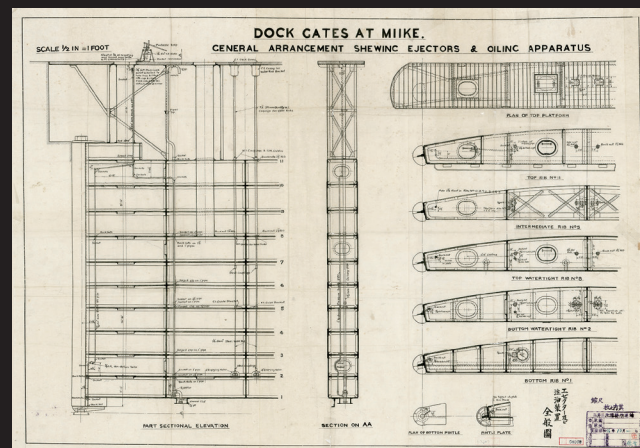
1.40歳の圓 琢磨



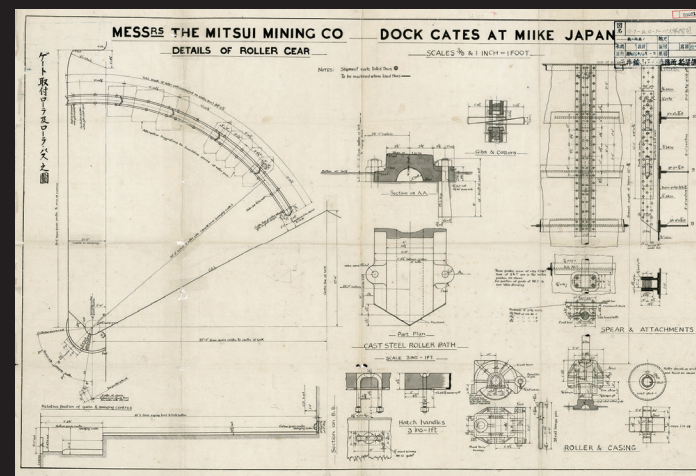
3.三池港閘門を通過する大型船



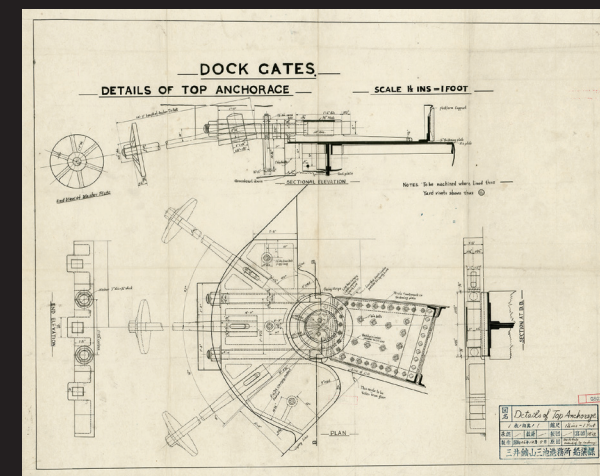
4.閘門ゲート設置全般図



5.閘門ゲート断面・側面図



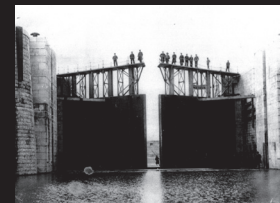
6.ゲート取付ローラー及びローラーバス図



7.ゲート回転部詳細図



8.潮止め工事中の三池港



9.組立完成時の閘門ゲート



10.現在の閘門



11.現在のスルーゲート



12.閘門部材に付けられた英国製を示す銘盤

ゲートの遮水性を高めるために両側の扉の合わせ目には木材が用いられたが、これは船虫などの虫害に強く、比重の重い南米産グリーンハート材である。完成当時、渠内の水中にこの木材の予備が保管された。昭和56(1981)年にこれを引き上げたところ、76年経過していたにもかかわらず十分に使用に耐え得る状態であった。この木材は現在、閘門接合部に取り付けられ使用されている。

閘門の両側には大型船が渠内に入港したときに海水を逃がす煉瓦造りのスルーゲートが設置されている。スルーゲートの先に延びる美しい切石組みの護岸は市内の勝立付近や天草から切り出された石材を三池まで運び、加工されたものである。船渠内は船が無い場合も常に約7mの水深に保たれ、その水圧によって石積み護岸を安定させている。(榎本 碧)